

「みんなでトーク」では、会場の皆様の御意見を交えながら行われました。

(H20.3.2 広島県男女共同参画フォーラム)

【資料1】ワーク・ライフ・バランスとは...

<会場への質問 > (対象者:女性/男性)

Q. 女性は子どもができて働き続けた方がよいと思いますか。

【資料2】共働き等世帯数の推移

(篠原さん)働きたい人、または働き続けざるを得ない人が増えています。やる気を起こさせる職場環境、仕事の配分、女性の能力を活かすという企業の考え方、女性側の考えの変化など色々な要素があると思いますが、共働き世帯の増える傾向は減りそうもないと言われています。

【資料3】一般的に女性が職業を持つことに対する意識変化(女性の意識・男性の意識)

<会場へ質問 > (対象者:男性)

Q. 子どもが生まれた時、育児休業を取得しましたか。

(篠原さん)男性社員に対して、短い期間の育児休業でもいいので、取得するよう声掛けをしている企業もあります。最近では、育児休業の取得を義務化している企業も出てきています。世の中が変わり始めています。

(安藤さん)育児休業の取得により、何をしたいのかという点が大切です。男性が育児休業を取らない3つの理由として、所得ロス、キャリアロス、業務知識ロスの不安が挙げられます。僕は今、あるITベンチャーの役員として、育児休業中に培った能力を新規事業の立ち上げに結び付けることができれば昇給するといった制度を作っています。

(篠原さん)就職が売り手市場になっており、就職活動中の学生もワーク・ライフ・バランスが取りやすい企業を選び始めています。これまでの企業は女性の両立支援について一生懸命取り組んでいましたが、良い人材を確保するためには男性の意識改革、多様な働き方の受け皿を作っていかなければ、優秀な人材が流出してしまいます。

(林さん)経営者サイドでは、育児休業の取得によるキャリアロスは無いという意思表示をしようとされています。当社でも、経営者から該当する社員に狙い撃ちで声をかけているくらいです。週末に家族と過ごすだけの父親ではなく、平日の子どもの公園遊びなどの経験を通じて、今まで知らなかった子どもの世界を感じることが出来ます。子育ては、自分もこういう風に育てられたという親への感謝や子どものものの見方など、学びや発見がたくさんあります。それらを女性のものだけにしておくのは非常にもったいないと思います。男性も子どもから学ぶいろいろな生き方、考え方をいろいろな場面で役立てていくチャンスがあると思います。人生の中で子どもによって制約を受ける時間はわずかな期間です。女性が自分らしく生きていくために、仕事を通じていろんなことを学び、出会いを活かして、これから先の人生を豊かにするという意味でも、仕事や子育てもぜひお勧めをしたいと思います。

<会場へ質問 > (対象者:男性)

Q. 家事・育児・介護等にかかわる時間は1日30分以上ですか。

(安藤さん)父親はお風呂に入れるのは得意です。ただ、入れ終わった後、おへそを消毒したり、天花粉をつけたり、白湯を飲ませたりすることをお母さんに任せてしまっていては駄目です。ゴミ出しも部屋のゴミを分別して、台所の残飯を新聞紙で包んだりして、ゴミ袋にまとめて出す作業をゴミ出しと言うのであって、妻が集めたゴミをゴミ置き場に持って行くだけでは単にゴミ袋移動です。

【資料4】夫婦の生活時間

(篠原さん)日本の男性の約30分に対して、ヨーロッパやアメリカの男性は1時間や2時間という統計があります。日曜日は家事・育児・介護等に関わる男性の時間が増えるのかと思うと、共働き世帯の場合でもあまり変わらないのです。

(安藤さん)シカゴ大学の調査で、子ども一人を持つ母親に、「二人目が欲しいですか、その条件には何がありますか」と質問をした調査があります。結果は、「夫の給料が10万円上がる」という条件と、「夫婦の会話が一日20分増える」という条件が同価値でした。つまり、経済的な問題だけでなく、夫婦の支えあう時間が大切であ

ると女性は考えているのです。

[資料5]フルタイム労働者に占める週60時間以上働く人の割合

(安藤さん)企業の業績や社員の給料も上がっているけれども、社員は幸せ感を感じていない。つまり、長時間労働によって、何とか会社経営が保たれているのです。会社に自分が取り込まれ、流されていること、そしてその陰には家族が犠牲になっていることに気づいてほしいと思います。

(林さん)企業は働き方の多様化、労働力の確保という点で、大変苦勞しています。経営陣は男女問わず、長く働き続けてもらいたいと思い始めているはず。私の会社では、ファミリーディナーデーと称して、みんなで残業をせず家族と夕食を楽しむ日にしようという取組にチャレンジ中です。

(安藤さん)日本の残業時間は世界一長いにも関わらず、日本の労働生産性は先進国で最下位です。いかに効率の悪い働き方をしているかということ、一人ひとりが考えるべきです。本当に早く帰れないのか、周りが残っているから帰れないと思っている人がほとんどではないかという気がします。これが日本の悪しき企業文化です。長時間働けば、それだけ業績が上がる時代は終わりました。僕は以前勤めていたIT企業の部長の時代に、部下に対して、6時以降は友達に会ったり、デートをしたり、映画を見たり、いろんな刺激や感性をインプットすることで、新しい仕事のアイデアが生まれて新規事業は生まれるのだと言ってきました。逆に、ダラダラと仕事をしている人には「評価を下げるぞ」と言ってきました。

いろいろ言い訳をして育児に関わらない父親は多いのですが、結局、自分にツケが帰ってくるし、子どもにも影響が出ると思います。いつも疲れて、暗い顔して、何も語らない、関与しない、「疲れた」という言葉しか言わない父親に対して、母親もそろそろ我慢の限界でしょう。子どもだって、自分はそんなつまらない大人になろうとは思いません。だから、「父親よ、自立せよ。もっとカッコいい生き方をしようよ」と僕達は言っています。

働き方についても、長時間労働により過労死や過労うつになっていく父親を見ていると、ワークライフ・ライフ・バランスではなく「ワーク・リブ・バランス」、つまり仕事と命のバランスの問題にまでなっていると痛感します。自分が死んだら、残された家族はどうするのか？それを想像することもできないほど思考停止に陥っている父親がいるとしたら目を覚ましてほしいです。周囲のムードに影響されて早く帰れない、有給休暇が取れないといった考えから早く抜け出してほしいです。

(篠原さん)まずは県の職員自らがワーク・ライフ・バランスを実践する職場の雰囲気を作って、課長級の方から実践していき、若い職員に応援メッセージを届けてほしいです。勤務時間外や休日に、行政の担当者として培ってきた能力を一市民としてぜひ地域活動に活かしてほしいです。

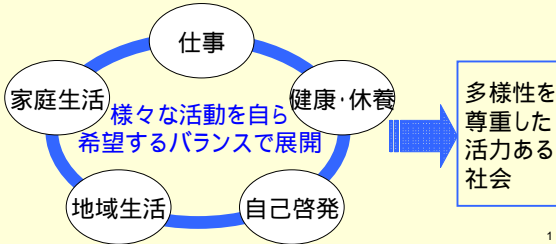
(安藤さん)これからの父親の子育ては、「やる父親」と「やらない父親」に二極化します。日本では育児をしない母親はネグレクトだと批判されますが、やらない父親は別に責められません。気づいた人だけがハッピーになれるということでしょうか。主体的に楽しんでいる父親は仕事以外に、地域活動などいろいろな豊かさを感じて、楽しい人生を送っていけると思います。妻や子どもから信頼され、また地域社会からも頼られ、会社でも能力を発揮して頼られる楽しい人生です。逆にそうでない人は会社にぶら下って、いつまでも自立できずに流されて生きていく。育児期間が終わって子どもが家にいなくなったら、きっと妻から見放されるでしょう。そして淋しく人生を終えていくのだと思います。ある旅行会社の調べによると、「定年後、誰と旅行に行きたいか」という質問に対して、夫の9割以上は妻と回答しますが、妻は「夫以外」と回答するのが現実です。逆に子育て世代に支え合ってきた夫婦は、中高年になってからも良い関係が続くというデータもあります。

子育てほど面白い仕事はないと思います。子どもは誰一人同じでないからです。子育ては「我が家のプロジェクトX(エックス)」です。そして父親ほど世界で素晴らしい仕事はないのです。

(林さん)子育ては夫婦共に協力しながら、悪戦苦闘しながらやってきました。また、いろんな方々に支えてもらいました。安藤さんの講演にあった寄せ鍋理論のように、関わる人たちが広がれば広がるほど、そこにいるんな出し汁が出て、感謝の気持ちも広がっていくと思います。男性も「これだけ給料もらって帰ったぞ」という父親よりも、家族みんなに感謝される父親がハッピーだと思います。

ワーク・ライフ・バランスとは？

仕事、家庭生活、地域生活、個人の自己啓発など、様々な活動について、自らが希望するバランスで展開できる状態



1

ワーク・ライフ・バランスに関する3つのポイント

男性も女性も、あらゆる世代の人のためのもの

人生の段階に応じて自ら希望する「バランス」を決められるもの

「仕事の充実」と「仕事以外の生活の充実」の好循環をもたらす

2

社会全体にとっての必要性

- 労働力不足の深刻化
- 生産性の低下・活力の衰退
- 少子化の急速な進行
- 地域社会のつながりの希薄化

経済社会の活力向上のために必要

3

個々の企業・組織にとっての必要性

- 人材獲得競争の激化

多様な人材を生かし競争力を強化するために必要

- 従業員の人生の段階に応じたニーズへの対応
- 意欲や満足度の向上
- 心身の健康の維持
- 女性の活用

4

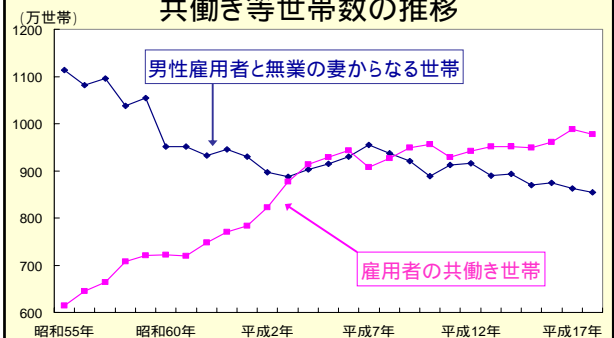
個人にとっての必要性

- 仕事と家庭の両立が困難
 - ライフスタイルや意識の変化
 - 両立希望に反して仕事中心になる男性
 - 家庭責任が重く希望する形で働くのが難しい女性
- 自己啓発や地域活動への参加が困難
- 長時間労働が心身の健康に悪影響

希望するバランスの実現のために必要

5

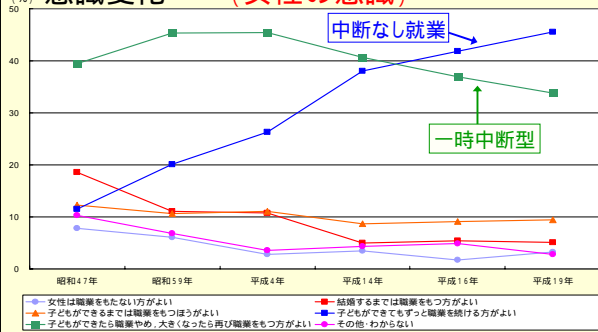
共働き等世帯数の推移



(備考) 1 昭和55年から平成13年は総務省「労働力調査特別調査」(各月2月、ただし、昭和55年から昭和57年は各年3月)、14年以降は「労働力調査(詳細結果)」(年平均)より作成
2 「男性雇用者と無業の妻からなる世帯」とは、夫が非農林業雇用者で、妻が非就業者(非労働力人口及び完全失業者)の世帯
3 「雇用者の共働き世帯」とは、夫婦ともに非農林業雇用者の世帯
4 昭和40年以降は「夫婦のみの世帯」、「夫婦と親から成る世帯」、「夫婦と子どもから成る世帯」及び「夫婦、子どもと親から成る世帯」のみの世帯数
5 「労働力調査特別調査」と「労働力調査(詳細結果)」とは、調査方法、調査月などが相違することから、時系列比較には注意を要する。

6

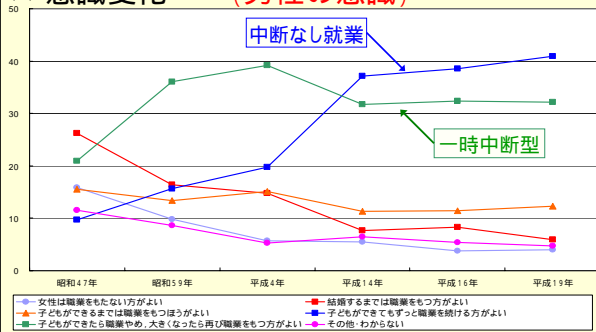
一般的に女性が職業を持つことに対する意識変化 (女性の意識)



(備考)内閣府「男女共同参画社会に関する世論調査」(平成19年8月)等、内閣府世論調査から作成

7

一般的に女性が職業を持つことに対する意識変化 (男性の意識)

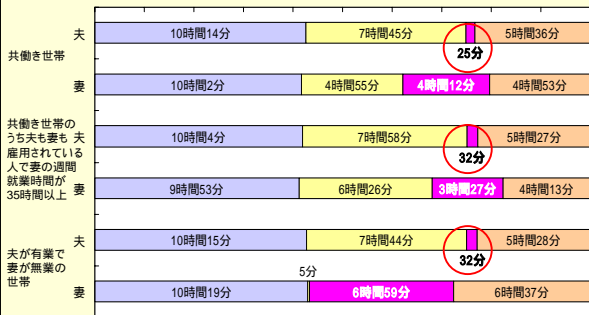


(備考)内閣府「男女共同参画社会に関する世論調査」(平成19年8月)等、内閣府世論調査から作成

8

夫婦の生活時間

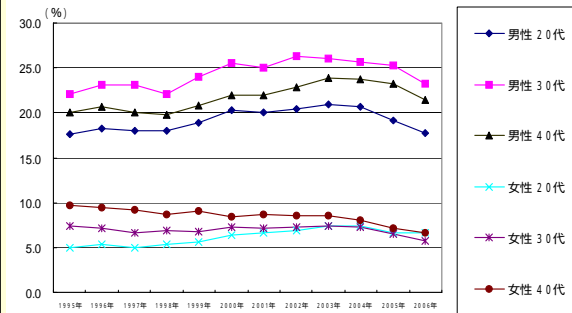
睡眠・食事等 仕事・通勤等 家事・育児・介護等 自由時間(3次活動時間)



(備考)総務省「社会生活基本調査」(平成13年)から作成

9

フルタイム労働者に占める週60時間以上働く人の割合



(備考)1 総務省「労働力調査」から作成

2 「フルタイム労働者」とは週間就業時間が35時間以上の就業者である。

10